



寄稿

公共空間から再構築する地域福祉

—路上から生まれる「まちづくり」と子ども・若者支援—

全国こども福祉センター理事長 荒井和樹

1. なぜ「路上」なのか

支援制度や相談窓口が整備される一方、制度にも支援にもつながれない子ども・若者が存在する。しかしそれは単に「つながっていないから問題だ」と言い切れない。既存の枠組みでは解けない困難があり、支援を受けること自体が負担やリスクになる場面もある。では、そうした人びとはどのようにして困難を乗り越え、



公共空間（路上）でのアウトリーチ：著者（左）と学生ボランティア（右）

日常生活を成立させているのだろうか。この問いから、私たちの実践は始まった。子ども・若者が向かう場として、S N Sと路上がある。そこでは仲間や情報、仕事に出会う一方、勧誘・搾取・犯罪への誘いもある。2012年当時、危険な誘いはあっても福祉的な声かけはほとんどなかった。だから私たちは、子どもや若者が実際に向かう場所で、まず安全に出会える関係をつくるため、路上に立つことを選んだ。

路上は行政窓口でも施設でもないが、誰にとっても開かれた公共空間であり、制度の外側にいる人と最初に顔を合わせられる。私たちは専門職として介入するのではなく、同じ場に居合わせる一人として声をかけ、雑談を交わし、沈黙も含めて時間をともにしてきた。支援への不信感が強い人にとって、説明や接続を急ぐことは「押し付け」になりうる。だからこそ関係を育て、離れても戻ってこられる余白を残しつつ、必要があれば本人の意思とタイミングを尊重して制度・機関につなぐ。こうして私たちは、支援の手前にいる人びとと出会うため、路上に立ち続けてきた。



2. 路上アウトリーチの実際

路上アウトリーチは名古屋駅西エリアを中心に週1回、夕方から夜に行う。私たちが整えるのは「相談につなげる導線」



16歳
精神疾患
自殺未遂
援助交際

15歳
いじめ被害・
不登校経験

22歳
親からの
過干渉で悩む

20歳
外国籍
孤立

12歳
いじめ被害・
不登校経験
自殺未遂

15歳
家出・不登校
援助交際
被虐待経験

19歳
知的障害
被虐待経験
犯罪歴
少年院出身

19歳
被虐待経験
性被害経験
ホームレス

18歳:無国籍
児童養護施設出身

属性の開示を前提にせず、多様な背景の子ども・若者を受け入れる場のあり方

「説明すべき情報」として

参加者には障害や病氣、性被害、自殺未遂、不登校経験などを抱える人も少なくない。しかし路上では、それらの属性は最初から「説明すべき情報」として

よりも、安心して立ち止まれる条件である。雑談を強えず、目的を押し付けず、先入観や結論を持ち込まずに出会い、相手のペースで関係を重ねる。

社会福祉領域でアウトリーチは「訪問支援」や「指導・訓練」と結びつきやすいが、それが管理・介入として経験され距離を生むこともある。そこで私たちは、支援を目的化せず、交流の起点に公共空間で出会い直す発想へ組み替えた。着ぐるみは話しかけやすさをつくり警戒をほぐす工夫である。交わされるのは近況や趣味などのたわいない会話だが、継続するなかで「眠れない」「家にいると苦しい」といった言葉にならな

て求められない。先にあるのは「一緒にいてよい」という感覚であり、関係が積み重なった後に、必要があれば支援資源へ接続する。重要なのは、つながること自体を到達点にせず、つながる／つながらないを評価にしないことである。だからこそ離れても関係が切れにくく、必要ときにまた参加・相談できる。

3. 共同体自治

私たちが実践を通して言語化してきた概念が「共同体自治」である。共同体自治とは、専門家が場を管理し参加者をプログラムに乗せる「ことではない。場に一人ひとりが互いの存在を気かけ、役割を引き受け、話し合いながら場を更新していくプロセスである。遅れてきた仲間

声かける、初参加に挨拶する、荒れている人への距離の取り方を相談する。そうした小さな判断の積み重ねが自治になる。

ここでの自治は統制ではなく、「排除しない」「測らない」「急がせない」という前提の共有によって保たれる。成果指標に寄りすぎると参加は「従うこと」になり、本人が決める余地が狭まる。共同体

自治は、“居ること”が肯定され、やがて“担うこと”へ移っていきける条件を守り続ける営みである。参加は義務ではなく、頻度や関わり方は本人が決める。来てもよいし来られない週があってもよい。ただ居るだけの日もあれば役割を引き受ける日もある。その選び取りの積み重ねによって、場が保たれ更新されていく。

共同体自治は「何でも受け入れる」ことではない。たとえば暴力やハラスメント、性的搾取、金銭の強要など、他者の尊厳を侵す行為には線を引く。場の安全が揺らぐときは、参加者に役割や参加を押し付けず、複数名で見守り、いったん距離を置く提案や退出のお願いも行う。運営を担う側も無理をしない。疲弊や恐怖が蓄積すれば、場そのものが続かないからである。そのうえで、再び戻ってこられる余白を残すため、何が問題だったのかを整理し、そのうえで、次にどう関わるか（声かけの仕方、対応する際の人数、連絡先の扱い等）をメンバー間で共有し、振り返りを重ねる。必要に応じて警察・医療・行政・関係機関とも連携する。こうした限界設定があるからこそ、「測らない」「急がせない」という前提も守れる。排除を解決策にしない。調整と合意の更

新によって、おたがいに居られる状態を整える。自治とは統制ではなく、安全と自由を両立させるための話し合いの技術である。

4. 路上から「まちづくり」へ

路上で生まれた相互扶助は、やがて地域へと広がっていく。私たちが名古屋駅西の公共空間で10年以上活動を続けてきたことで、地域住民のなかに「見慣れた

存在」として認知が蓄積され、街の側から関わりが生まれてきた。行政や関係機関、マスコミにも徐々に知られるようになり、その結果として、子どもや若者だけでなく、地域住民や子育て家庭が「相談したい」「少し話を聞いてほしい」「利用してみたい」とセンターに足を運ぶ場面も増えている。

この変化は、福祉サービスが単に“提供される”というより、公共空間を介して地域の関係が組み替わっていくプロセスである。路上での継続的な出会いが、地域の人びとととの「頼ってよい先」「つながってよい先」を増やし、寄付や物資支援といった形でも支えが集まる。さらに、子どもや若者が集うことで、周辺で食事をしたり買い物をしたりと、街のなかでお金を使う機会も生まれる。こうした循環は、福祉の枠を越えて地域の生活と結びついた生産関係（支え合いと経済の往還）を形づくっていく。

加えて、全国子ども福祉センターの運営は、資金構造が比較的シンプルで、何にお金が必要で、どのように成り立っているかが見えやすい。寄付や募金、物資が活動を支え、場が維持され、次の出会いが生まれる。メンバーである子どもや



募金活動を行う子ども・若者メンバー



(全国こども福祉センターの実践) 内閣総理大臣表彰 (2023年) と書籍化

若者も、この共同体がどのように成立しているかを理解しやすく、自分にできることを引き受けて「支える側」に回っていく。相互扶助が一時的な助け合いにとどまらず、公共空間を媒介に、地域の中で持続する関係へと育っていくのである。

まちづくりを「計画」や「整備」と捉えると、路上の実践は周縁に見えるかもしれない。しかし、まちづくりを「誰が公共空間に居られるか」「誰が地域の一員として扱われるか」という公共性の問いとして捉えるなら、路上は中心にある。路上での出会いを起点に、相談や利用、寄付や支援、さらには地域での消費や担い手化までが連なっていくとき、地域福祉は制度の内側だけで完結せず、公共空

間を通じて再構築されていく。こうした連なりは、特別な事業を新設しなくても、公共空間での継続的な出会いから始められる。

5. 自治体実務への示唆

自治体が学ぶべきは方法の模倣ではなく、「関係が壊れない前提条件」を言語化し、行政・委託先・地域で共有することである。たとえば、①入口は相談ではなく出会い（雑談や沈黙も含む）、②出入りの自由（継続の強制をしない）、③当事者を対象ではなく担い手として迎える、④限界設定と安全確保（無理をしない／暴力・ハラスメントの線引き）、⑤必要時に専門資源へ接続、の5点は汎用性が高い。評価も成果の数値だけに寄せない。交流の継続や再接触、対立が排除ではなく対話として扱われた経過など、関係の維持・回復を示す指標を併走させることで、現場が「評価のための運営」へ変質することを防げる。制度の外側にいる人と出会いは続けるためには、制度の内側にいる側こそ「測らない姿勢」を守り続ける必要がある。

6. 書籍紹介・結語―支援を越えて、ともに生きる地域へ（整形版）

以上の議論を、実践の背景と理論の両面からさらに掘り下げたのが、拙著『能力社会から共同体自治へ』（せせらぎ出版）である。競争と成果主義が強まる社会では、人は「できる／できない」で測られ、支援さえも成果や数値で測る枠組みに組み込まれやすい。路上から始まった実践が示してきたのは、測られない関係の中で人間関係が回復し、役割を引き受け、地域の公共性が立ち上がっていく可能性である。各地で、制度の手前にいる人びとと出会い直し、相互扶助からまちづくりへとつながる実践が芽吹くことを願っている。

【参考文献】

厚生労働省 (2025) 『地域共生社会の更なる展開について』
Hart, R. A. (1992). Children's Participation: From Tokenism to Citizenship. UNICEF.